

## 各部門の最優秀作品の概要

### 【新築住宅部門 最優秀賞】

作品名「倉敷の町家（ゴールドドロップのあかり）」

(入賞者：大角 雄三 氏)



#### (設計コンセプト)

倉敷駅前の大通りを南に5分ほど歩いた所にある敷地で、古くからの町割りが残るエリア。周辺は伝統的な町家や生活道となっている小さな路地、駅前再開発エリア、古民家が解体されて歯抜けになり空き地やコインパーキングになったもの等、新旧様々なものが混在している。

建物は間口6m、奥行45m、中腹で30度ほど折れ曲がる敷地形状に沿わせた配置とし、「くの字」に曲がったウナギの寝床のような木造二階建ての町家形式をとっている。敷地の南側には道幅の狭い路地があり、この路地を積極的に取り込んでいる。路地/セットバック/竹塀/地盤の高低差/植栽/中庭/縁側/障子・欄間/内部空間といった具合に、緩やかに敷地境界から建物内部をつかず離れずの関係になるようにデザインした。昼間は障子の開閉により、開放的から閉鎖的な使用が可能で、十分な光量と通風、適度なプライバシーがあり快適に暮らせる。細長い間取りに対し、寝室や水廻りは入れ子状にコンパクトにまとめ、空調負荷を減らしている。

建物の南北両面にはハイサイドの連続窓、東面には倉敷格子や色塗りされたガラス小窓を設け、美しいあかりがこぼれる。この家で考えたことは「省エネだけ」でなく、「省エネだけど美しい景観」を生み出すデザインである。あかりを灯す喜びをもう一度真剣に感じる。建築がフィルターとなって光を抽出し、地域全体に光の雫が広がる。

#### (審査委員講評)

前面道路側のファサードと南側裏路地の2面性を持つ敷地に対して、伝統的なエッセンスを用いながらも現代的なデザインによってこの場所の持っている可能性を引き出している秀逸な住宅です。近隣との適度な距離感を生む様々な操作がプライバシー性や採光・通風を丁寧に取り込み、まちに開くデザインは住まい手だけでなく、路地を歩く人にとっても心地よい場所性を提供しています。

## 【リフォーム住宅部門 最優秀賞】

作品名「5坪の家 小宅～kota～」

(入賞者：國本 広行 氏)



### (設計コンセプト)

便利すぎ、物にあふれた世の中に少しだけ疑問を持ったことから始まった今回の家づくり。老朽化が進み改修が必要だった蔵を、夫婦2人がミニマルな暮らしを楽しめる5坪の家としてリノベーションした。過剰な機能を削ぎ落とし、最小限のスペースで叶うシンプルかつ快適な暮らしを追求することで、自然循環に即したサステナブルな住まいを実現した。

一般的な家に備わっている設備機器や間仕切りを全て見直し、生活の質を落とすことなく自然エネルギーや自然素材を活用できるものは代替えた。これにより、メンテナンスの手間や設置スペースを削減することができた。

具体的には、①1階に薪ストーブを設置して2階と完全に仕切らないことで、温度差で生じる気流で家全体を温める仕組みにし、空調機器の縮小を図った。②場所ごとの必要な明るさや周囲からの視線、借景を意識して、日中はほぼ窓からの自然光のみで過ごせるようにし、カーテンの必要性を省略した。③床に無垢材、壁に珪藻土を採用し、自然の調湿効果で室内環境を安定させるようにした。

狭小空間から暮らしの豊かさを創出するために、最短の生活動線で動けるよう配慮した。特に造作キッチン、適材・適所・適量の収納計画とし、シンク下には作業台にもなる収納キャスターも造作した。さらに、1つの場所で多様な過ごし方が楽しめるよう、障子を閉めると読書部屋にもなるソファや、畑への勝手口にもなる窓など工夫を施した。

### (審査委員講評)

ひと目見て可愛さと愛着を感じるお家です。

レベル差のある畑とキッチンとの関係や2階の段差ソファの居心地も巧みでシンプルさの中に設計者の力量を存分に感じさせます。薪ストーブや2階のエアコンの仕掛けも最小限のエネルギーで最大の効率を生み出しているように思われ、小ささが最大の省エネと改めて感じさせてくれる住宅です。

## 【学生部門 最優秀賞】

作品名「借り、整え、還す」

(入賞者：丸山 周 氏、佐古 統哉 氏)

### (設計コンセプト)

私たちは、サステナブルな循環を地域全体へと拡張させる建築の在り方を提案します。

この住宅の計画地は千葉県山武市の山林です。この地では、人が杉を植え、手入れをし、間伐を行い、伐採し利用してまた育てていくという、杉と人間とのサステナブルな循環が脈々と続いてきました。しかし、この循環は人間が杉の手入れを怠り強引な山林開発を行った数十年の間に崩壊していきました。

今、私たちは積極的に山武杉と関係を持つ暮らしをもう一度考える必要があります。

この住宅は、地域に開かれた「つながるアトリエ」、「来客者のためのラウンジ」、夫婦の暮らしの拠点となる「夫婦のための家」の三分棟で構成されます。三棟をつなぐ基礎は、夏はクールピットとして、冬はヒートチューブとして利用することで、一年を通じて冷暖房負荷の少ない暮らしを実現します。また、間伐材を燃やした際に生じる灰は畑の肥料として利用し、農作を通じた資源の循環を実現します。さらに、「つながるアトリエ」は麓の中学校に通う子どもたちや地域の人々が創作活動を行う場であり、積極的な木材利用を推進するとともに、世代を超えて山林への適度な介入や循環の大切さを学ぶ場となります。

夫婦の暮らしと地域のコミュニティが山武杉を介して接する住宅。杉が根を張り土をつなぎとめていくように、山武杉と人との接点が地域を巻き込んだサステナブルな暮らしをつなぎ、循環させていきます。

### (審査委員講評)

昨今、なにかと厄介者扱いされている杉の木と人間がよい関係を構築するには？その問いに具体的に答えてくれています。プロジェクト全体を説明する断面図のイラストはとても見やすく、わかりやすいものです。いくら独創性に富んだアイデアでも、それを人に伝える技が稚拙であれば意味がありません。その点、この作品は秀逸です。